

2021/3/13

(うとQ世話し 出所不明の「スッポン魂」)

我が国で起業した者の内、およそ95%の事業者が5年以内に消えてしまっているのだそうです。6年目以降、残っているのは、たった5%だけ。

この数字は案外知られていません。特に起業者そのものに顕著のようです。

起業するつもりのない時には、この数字を耳にして

「そりゃ、そんなもんだろう」

と知っている人でも、いざ自分が起業するとなると、この数字に対する感覚が何故か突然、瞬間蒸発し、無意識の内に

「(自分の場合に限っては)95%、1、2年以内に成功するだろう」

とってしまうようです。

ところが実際蓋を開けてみると、とてもじゃないが、そんな状態ではない事に突如気づかされます。そうして、それから程なく、休業又は廃業か撤退。

「見通しが甘いから」でしょうか？

その通り。

ですがこの場合の「見通し」とは何でしょう？

この文学的表現を今少し科学的数理を用いて申し上げますと

「認識設定又は想定数値の過ち」

即ち

「達成迄に味わう(経験する)失敗の数と達成までに掛る時間の設定間違い」

ではなかろうか？と。

具体的に申し上げますと

達成迄の失敗経験数1、2回で、それまでの苦労(忍耐)期間1、2年の認識でいけば、失敗第3回目以降、期間3年目以降というのは、もうあり得ない事態な訳です。

しかし、以前の記事でも申し上げましたとおり、成功出現率等というものは100の内、ほんの3から5%程度のものですし、その出現時期というものは大抵が5年目以降10年位は平均的に掛ります。

だとすると、それを知らずにか、それを待たずしてかのどちらかで、休業又は廃業、撤退してしまっている事になります。

出口を見つける前に引き返してしまっている訳です。

それが「見通し(誤認)」の正体。

もし上述の正しい出現率や出現迄に要する期間についての認識が起業者にちゃんと備わっていれば撤退率はひょっとすると半分以下になっているかもしれません。

特に冒頭の5年以内に95%撤退の傾向に関しては

「失敗は恥じ。一度の失敗が命取り」思考の我が国に於いて顕著な様です。

「失敗しないとgreatになれないから、失敗はどんどんする」

思考の海外の人達との差が、こういった処にも現れる様です。

何故この様な事を言うかと申せば、かく言う自分自身が失敗続きだからです。ある意味自己弁護による自己正当化とでも申しましょうか。

しかし、失敗する度に思う事があります。

それは

「やろうとしている事が間違っさえなければ、いずれ時は来る。只、まだそれを活かす chance (天が与える偶然) に巡り会っていないだけだ。仕方が無いから「自分の努力ではどうにもならない残り半分のそれ」が来る迄、今暫く待っていよう」

という事です。

起業して既に7年。

その chance は未だ来ていませんが、諦める積りもありません。

未だ後3年あります。

この根拠無き確信の出所は不明ですが、
数理的には合っていそうだ。後の根拠は

「仇名がスッポンだから」

位かな？